

人物

シテ（行平）
アド（三位）
太刀持。
傘持。
茶屋。

業平餅

- （一）金小立烏帽子、縫領、指貫、込大口、狩衣。腰帶。笏を持つ。
（二）諸の名稱。三句から成り登場の最初に諱ふ。
（三）平安朝の公卿。阿保親王の第二子。民部卿中納言に上る。
（四）和歌山縣海草郡和歌浦町にあり、稚日女命・神功皇后・衣通姫命を祀る。中世以後和歌の神として崇まれる。
（五）風折烏帽子、厚板、狂言袴、掛素袍、腰帶、小刀、扇。
（六）折烏帽子、段熨斗口、狂言袴、括る、脚絆、掛素袍、腰帶、小刀、扇。太刀及び傘を持つ。
（七）以下皆舞臺を廻り、道中の心。
（八）皇居の異稱。御所。禁廷。大内山。

シテ（次郎）「和歌の心を友として、玉津島詣急がん。」これは在原の行平でござる。某いまだ玉津島の明神へ参らぬ程に、今日は参詣致さうと存ずる。やい、居るかやい。アドはあ、これに居りまする。シテ何と思ふぞ。玉津島の明神は和歌の神なれば、参詣せうと思ふが何とあらうぞ。アドこれは一段とようござりませう。シテいざ参らう。汝ら供をせい。アド畏まつてござる。さあ、おりやれ。供二人心得てござる。シテ何と思ふぞ。數年大内に住みながら玉津島へ参らぬと言ふは、愚な事では無いか。アド御意の如く、唯今までお参りなされぬと申すは、ちと御延引な事でござりまする。シテ汝が言ふ通りぢや。とてもものに邊り近い名所舊跡を、残り無く見物せうと思ふが何とあらうぞ。アド仰せらるる通り、常にお出でなさるが御不自由にござりまするによつて、所を御見物なされたならばようござりませう。シテさて未明より出たれば殊の外草臥れたが、この邊りに休み所はあるまいかな。アド私の尋ねて

- (九)いつその事。
 (一〇)橋掛りへ行き、一の松に立ちどまる。
 (一一)「が」の意。
 (一二)脇正面へ出て。
 (一三)脇柱から大小前を見て。
 (一四)段腹斗目、長袴、小刀、扇。
 (一五)分不相應の意から、感謝の言葉に便ふ。
 (一六)シテの許へ行き。
 (一七)脇柱の際へ行き、葛桶に腰をかける。アドは茶屋の傍へ、供二人は太鼓座の前に並ぶ。
 (一八)後見より葛桶の蓋を受取り出す。
 (一九)飲んで。

(二〇)心地よい。すがくしい。

- (二一)さてく。
 (二二)手で胸を指す。
 (二三)一向。少しも。
 (二四)空腹である。ひもじい。四河入海「ひだるい腸に酒を飲たれば酔て」
 (二五)シテは口に手をあてる。
 (二六)どうしてく。何のく。
 (二七)困った。

参りませう。それにちと待たせられませい。シテ早う尋ねて来い。アド畏まつてござる。この邊りに茶屋は無いか知らぬ。いや、これに茶屋がある。やいやい茶屋茶屋。茶屋はあ。アドさるお方のお茶を召し上がられうとある程に、上げさせませ。茶屋なかく上げませう。まづお腰をかけさせらるるやうに、仰せ上げられて下されませい。アドそれは過分におりやる。その通りを申し上げう。申しく。あれによい茶屋がござりまする。まづお腰をかけさせられませい。シテ心得た。アドさあく茶を綺麗にして上げさせませ。茶屋随分清めて上げませう。さらば上げさせられて下されませい。アド心得ておりやる。お茶を上げまする。シテやい。茶を飲うだれば心が晴れくとなつた。アドさやうでござりませう。シテも一つ飲まう。アド畏まつてござる。なうく茶屋。も一つ召し上がらうとある程に上げさせませ。茶屋それは有難う存じまする。アド最前も言ふ通り、随分清めて上げさせませ。茶屋心得ましてござる。さらば上げさせられて下されませい。アド心得た。さらば上げまする。シテ何と思ふぞ。大内とは違うて山山の景は潔きよい事では無いか。アド御意の如くよい景色でござる。も一つ上りませぬか。シテいやもう飲むまい。アドそれならば仕

舞はせませう。なうく茶屋。最早召し上がられまいとある程に、仕舞はしませ。茶屋畏まつてござる。アド申し、最早お立ちなされたならばようござりませう。シテまづ待て。いかう淋しうなつたわいやい。アド大内とは違ひませう。茶屋が何かと申せば如何でござる。早うお立ちなされませい。シテはてさてちは氣のつかぬ。ここが淋しい。アドここが淋しいとは、一國合點が参りませぬ。シテひだるうなつたと言ふ事ぢや。アドしい。茶屋が承れば如何でござる。さてはおひもじいである事でござるか。シテなかく。アド玉津島へ参つて何ぞ上げませう程に、まづお立ちなされませい。シテいかなく。ひもじうて一足も歩まれさうも無いよ。アドはてさてそれは氣の毒な事でござる。もし茶屋に上がりまする物もござるか、問うて参りませう。シテ早う問うて来い。アド畏まつてござる。なうく茶屋。おひもじいと御意なさるるが、何ぞ召し上がるる物はあるまいか。茶屋折簡これに餅がござりまするが、召し上がられませうか。アドそれは幸ひな物がある。まづ何うて見よう。いや申しく。尋ねてござれば餅がござりまするが、召し上がられませうか。シテまづは幸ひな物がある。早う持て来い。アド畏まつてござる。なうくその餅を召し上がられ

(二六)後見より三寶に載せた餅を受取つて。茶屋 心得ましてござる。さらばこの餅を上げさせられて下されませい。アド心得た。すなはちこの餅でござる。召し上がられませい。シテさてもうまい餅ぢや。も一つ取て来い。畏まつてござる。な

(二七)シテは取つて袂へ入れ、食べる體。

(二八)「取つて」の約。

(二九)因果應報の約。幸運。

うく茶屋。そなたは果報な人ぢや。殊の外餅の風味がよいとあつて、御機嫌ぢや。も一つ上げさせませ。茶屋それは忝けなうござる。上げませう。さらば

(三〇)と半分程食べ、餅を咽喉に詰めた體をする。

(三一)シテの背中をさする。

上げさせられて下されませい。アドこれを上げたならば御機嫌であらう。さらば上がりませい。シテどりやく。アド申しく、これは何となされてござる

く。シテはあ、いやもうよい。これはうまい餅ぢや。何とぞ名があるかと言うて問うて来い。アド畏まつてござる。なうく茶屋。殊の外よい餅ぢやと仰せらるる。何とぞ名があるかと御意なさるる。茶屋御不審御尤もでござる。一

(三二)行平の弟。六歌仙の一人。

年在原の業平卿、この茶屋にお腰をかけさせられ、すなはちこの餅を召し上げられてより以來、業平餅と申します。アドこれは尤もぢや。その由を申し上げう。尋ねてござれば一年業平の卿、この茶屋にお腰をかけられ、すなはちこの餅を召し上げられましてより以來、業平餅と申すと申します。シテさては業平殿もこの餅を參つたと見た。不思議な事では無いか。アドさやうでござ

ります。シテも一つ取て来い。アド畏まつてござる。なうく、も一つ上げらうとある程に上げさせませ。茶屋最早出来合うたがござりませぬ。アド何と

こしらゆる事はなるまいか。茶屋にはかにはこしらゆる事はなりませぬ。よろしう仰せ上げられて下されませい。アド心得た。折節出来合うたが無いと申します。シテ無ければ是非に及ばぬ。玉津島へ參らう。さあく来い。茶

(三五)一寸。

(三六)「行つて」の約。

(三七)代金。

屋申し一寸これへござりませい。アドちと待たせられませい。茶屋が呼びます。いて參りませう。シテ早ういて来い。アド何事でありやる。茶屋最前の餅の價を下さるるやうに、仰せ上げられて下されませい。アド心得ておりやる。

いや申し、最前の餅の價をくれいと申します。シテ價は持たぬが、汝が方には無いか。アド折節私の方にも持ち合はせがござりませぬが。いや申しやうがござる。ちと待たせられませい。シテ心得た。アドなうく。折節持ち合はせ

(三八)よい人柄。立派な身分。じんたい。

がないが、明日都より持たせて上さう程に待つてたもれ。茶屋よう思召してもごらうじられませい。私共の營みと申すは、右から左へ取らねばならぬ商ひでござる。御人體とも覺えませぬ。まづいかやうなお方でござりまするぞ。アド何を隠さうぞ。在原の行平の卿でありやる。茶屋さては行平様でござりまする

(三) 事。
(四) 代金。

(四) 心中の工合。氣分。
(四) 歌を詠む氣持。
(四) 情無い。

(四) 内裏の正殿。
(四) 天皇の常の御殿。

か。さやうのお方とも存じませなんだ。それならば代りには及びませぬ。何卒お歌を一首拜領致したう存じます。この段を仰せ上げられて下されませい。
アトその由を申し上げて見よう。いや申し。茶屋が申しまするは、代りに及びませぬ。何卒お歌を一首拜領致したいと申します。シテ何ちや歌を詠め。アトなく。シテ尤もな所望なれども、今日は歌が詠まれさうも無いよ。アトそれは氣の毒な事でござります。何卒してお詠みなされませい。シテ今日は腹中合ひも勝れず、なか／＼歌機嫌では無いよ。アトはてさて比興な事を仰せられます。何卒して思ひ出して詠ませられませい。シテ都へ歸つてから詠うでやる事はなるまいか。アトさやうの事は申されますまい。シテいや思ひ出した事がある。都へ上つたならば、紫宸殿や清涼殿を拜ませうと言へ。アトまづさやうに申して見ませう。茶屋さても／＼氣の毒な事かな。在原の行平殿とやらでござるが、少少の餅の價が無いと見えてござる。アトなう／＼茶屋。最前の通りを申し上げたれば、にはかにお歌が出来かねさせらるるによつて、都へ上つてもあらうならば、紫宸殿や清涼殿を拜ませうと仰せらるる。茶屋紫宸殿清涼殿は拜みたるもござらぬ。それならばちと願がござるが、叶へて下されませうか。アト願によつて申し上げうが、いかやうな事でおりやる。茶屋別の事でもござりませぬ。獨りの娘を持つてござるが、田舎の住居を致させまするも不憫にござるによつて、都へ御同道なされて宮仕へになされて下されうならば、有難う存じます。アトまづ伺うて見よう。茶屋頼み上げます。アトいや申し。茶屋の申しまするは紫宸殿や清涼殿は拜むには及びませぬ、獨りの娘を持つてござるが、田舎の住居を致させまするも不憫にござるによつて、都へ御同道なされて、宮仕へになされて下されうならば、忝けなからうと申します。シテそれは一安い事ぢや。都へ同道せう程に、娘をこれへ連れて出よと言へ。アト畏まつてござる。なう／＼。申し上げたれば御同道なされうとある程に、娘を早う連れておりやれ。茶屋それは近頃有難う存じます。それならば連れて参りませう。アト早う連れておりやれ。茶屋畏まつてござる。申し／＼娘を連れて参つてござる。よろしう仰せ上げられて下されませい。アト幸ひぢや程に、わごりよもあれへ出てお目見えをさしませ。茶屋それは有難う存じます。アトすなはちこれが茶屋の亭主でござる。娘を同道致いて参つてござる。シテやい／＼茶屋茶屋。茶屋はあ。シテ願ひの通り娘を宮仕へに出いて取らせう

(四) 一番の。

(四) と言ひ揚幕に入り、姫を連れて出る。
(四) 姫を目附柱の方へ立たせて置き、仕手柱の先へ戻つて坐る。

(四) 茶屋は太鼓座へ行く。
(五) 今度。次同。

(五) と舞臺を廻る。姫は先に立つ。
(六) どちらも。皆皆。

(五) いかにも。なるほど。
(四) 家。住所。

(五) 距離。
(六) 漠然と對象を言ふ語。言ひし
ぶるさまを現す。

(五) 姫は脇柱の方へ、シテは目附
柱の方へ行つて立ちどまる。アド
と供二人は地謡座の方に立つ。
(六) 御苦勞。

(五) アドと供二人は揚幕に入る。
シテは仕手柱の際に見送る。
(六) 「うま〜と」の約。首尾よ
く。

(六) 美人の形容。
(六) 腰の細い事。
(六) 立つた姿。
(六) なりふり。そぶり。好色一代
男「とりなり男のごとし」

(六) 姫は又首をふる。
(六) 心の中が深くて測りにくい。
(六) 無理に被衣を取り、姫の顔を見
て、目附柱の方へ逃げ、袖をか
ざして坐る。

(六) 面・乙、髪、撥(はね)元結、
振袖縫箔、縫箔腰巻、女帯。縫箔
を被く。
(七) 以後。

(七) シテの傍へ寄り背中をさする
(七) 疎略。怠慢。
(七) 姫を突きつけ、仕手柱の方へ
逃げる。

(七) シテを捉へて。
(七) 情無い。すげない。

程に、氣遣ひすな。茶屋それは有難う存じまする。よろしうお取り立てなされ
て下されませい。シテやがて娘に逢ひながら大内へおりやれ。ゆるりと逢はう。
茶屋 何がさてお見舞申し上げませう。二人さらば〜。

シテ 何と思ふぞ。玉津島は重ねての事にして、まづ娘を都へ同道せう。アド一
段とようござりませう。シテさあ〜来い〜。アド畏まつてござる。いづれ
もおりやれ〜。供二人心得てござる。シテやい。娘を都へ同道するは不思議な
縁では無いか。アドいかさまこれは不思議な事でござりまする。シテ未明より
出たれば、玉津島で手間が要ると思うて、宿許では待ちかねてゐるであらう。
アド 定めてお待ちかねでござりませう程に、お急ぎなされたならばようござり
ませう。シテやう〜都近うなつたでは無いか。アド御意の如く程近うなりまし
てござる。シテ物ぢやは。都まで同道して對面するは待ち遠ぢやによつて、こ
こ許で一寸逢うて行きたいが何とあらうぞ。アドいや少しも早うお歸りなされ
て、御對面がようござりませう。シテいや〜待ち遠ぢやによつて、一寸逢う
て行かう。とても事の事に益事をせう程に、汝は大儀ながらこの邊りで酒を調へ
て來い。アド畏まつてござる。シテ兩人の者をも同道して、よい酒と肴を調へ

て來い。アド心得ましてござる。さあ〜おりやれ〜。供二人心得てござる。
シテ まんまと皆を遣いてござる。さらば對面致さう。ほつそりすはりの柳腰、
立ち姿の様子、都にも珍らしい取りなりでおりやる。なう〜不思議な縁で都
へ同道致すが、まづここ許で對面を致さう程に、その被衣を取らしませ。嫌ぢ
や。(笑)。定めて恥づかしさのままであらうが、外に人も無い程に、まづ取ら
しませ。(笑)。はてさて奥深い人ぢや。さうおしやつても取らねばならぬ。是
非ともに取らしませと言へば。申し〜行平様。都へ御同道なされて下さる
るやうな、嬉しい事はござりませぬ。向後はわらはが殿御でござりまする。可
愛がつて下されませい。シテ 何がさて同道致す程の事ぢやによつて、如在には
思はぬ。先へいて待つてゐる程に、わごりよは後からおりやれ。姫申し〜、
こなたには曲も無い。わらはを獨り置いてどちへ行かせらる。是非ともお供
致さねばなりませぬ。シテ少しも如在には思はぬが、一寸いて參る程に、そな
たはそれに待つてゐさしませ。姫はてさて異な事を仰せらる。子仲をないて
萬萬年も添ひませうと思つてゐまするに、そのやうな情無い事を仰せらる。
どちへなりとも、お供致いて參らねばなりませぬ。シテ ああ、うるさい。わご

- (六)又突きのけ逃げる。
- (七)又シテを捉へて。
- (七)夫婦になつて子を生む。
- (七)姫を突き倒して逃げ入る。
- (八)靜かに起きて手をふりながら追ひ入る。

りよは後からおりやれと言へば。なうくうるさやのく。經申し行平様。わらはを捨ててどちへ逃げさせらるる。是非ともにお供致いて參らねばなりませぬ。申しく。どちへござるぞ。まづ待たせられませい。

シテ(太郎)

人物

主。太郎冠者。立衆。

鹿ぞ啼く

- (一)段段斗目、長袴、小刀、扇。
- (二)どちらも。皆皆。
- (三)初心者が催す集會。
- (四)當番。
- (五)綯段斗目、狂言袴、腰帶、扇。
- (六)對稱の代名詞。あなた。
- (七)不義。無禮。不敬。
- (八)「行つて」の約。
- (九)御苦勞。
- (一〇)通路。
- (一一)主は箔座の上に坐る。
- (一二)聞き洩らすまいと緊張する。
- (一三)大きな喜び。

鹿ぞ啼く

主これはこの邊りの者でござる。某この度いづれもと寄り合ひ、連歌の初心講を結んでござるところに、すなはち今日は某の當に當つてござる程に、まづ召使ふ者を呼び出だいて申しつくる事がござる。太郎冠者居るかやい。太郎冠者はあ。主あるか。太郎冠者お前に。主汝を呼び出だすは別の事でも無い。當月は某の初心講の當に當つたが、何とてそちは黙つて居るぞ。太郎冠者こなたのお當の事は私の存じて居りますが、私の方より申し上げまするかへつて慮外ぢやと存じて、控へて居りましてござる。主これは尤もぢや。それならば汝は各々へいて言はうには、初心講の當に當つてござる程に、御大儀ながらお出でなされて下されい、さて裏の小座敷へ路次よりおはいりなされませいと申せ。太郎冠者畏つてござる。主早ういて來い。待つて居るぞ。太郎冠者はあ。太郎冠者さてもく嬉しい事かな。頼うだ人のお當の事を今くくと聞き耳を立てるやうに存じてござるところに、この度當らせらるるやうな大慶な事はど